

日本語教育における映像の可能性
—「映像で学ぶ日本語 2、3」クラスの授業実践の分析—

井上春菜、中井陽子

(早稲田大学)

映像を用いた日本語教育の目標として、長谷川、土井、保坂（2007）では「内容理解能力の養成」「異文化理解能力の養成」「コミュニケーション能力の養成」「ビデオを楽しむ」という4つを掲げ、その各目標のための学習活動の可能性を検討している。

本発表では、中井が担当した、某大学の初中級レベルの日本語科目「映像で学ぶ日本語 2,3」における創造的な協働や対話に焦点を当て、次の4種のインターアクション（①学習者と映像、②学習者同士、③学習者と授業ボランティア、④学習者と教師）を分析する。本授業の目標は、映像の中の言語・非言語・文化的な情報を理解し、分析し、討論する力を養うことにある。本授業の教室活動は、ディクテーション、語彙・表現の確認、討論、発表などであった。また、本コース全体を通して、井上の他、日本語母語話者が授業ボランティアとして数名、毎回参加していた。

4種のインターアクションの分析の結果は、以下の通りである。

- ① 映像をもとに学習者が新しい知識や問題意識を得て、自分自身を考え直す機会が与えられていた。
- ② 同じ映像に対する各学習者の捉え方の違いの発見に繋がっていた。
- ③ 日本語・日本社会で生きてきたボランティアと、それとは異なる言語・社会の学習者が映像を媒介にお互いの感覚・視点を交換し、異文化に対する洞察力をより深める機会が与えられていた。
- ④ 学習者にとって教師は、語彙・表現や文化背景を提示するだけでなく、教室内の様々なインターアクションを起こさせる教室活動の枠組み作りと進行役として手助けしていた。

以上のように、映像を扱った日本語教育において、映像の作り手や登場人物、学習者同士、授業ボランティア、教師などの他者と対峙して様々な異なる視点と接触し、映像の中のことばと文化を自分と照らし合わせて考え、他者に提示するという、多角的なインターアクションを起こさせる可能性について検討する。